

保育職を目指す学生によるトーン・チャイムの演奏と課題

水 嶋 育*

Tone Chime-Performance by Students Studying Early Childhood Education
and Problems to be Solved

Ikumu Mizushima

要約

保育職を目指す学生による演奏実践 2 例を挙げ、トーン・チャイムの楽器としての可能性と問題点を明らかにする。

キーワード：トーン・チャイム、保育者養成

(Abstract)

I will use two examples to clarify the possibility and difficulty of playing tone chimes by students who are studying early childhood education.

Keywords: Tone Chimes, Nursery School Teacher Training

はじめに

人はなぜ残響に心を奪われるのだろうか。例えば初めてピアノという楽器に触れた子どもが、無邪気にポンポンと鍵盤を叩き、まだ音楽ともならない音の羅列を楽しんでいる。そこでふと足元にある金色のペダルに気づいて、「これはいったい何だろう」と疑問に思う。右端のひとつをためしに踏み込んでみると、今まで自分の弾いていた乾燥した音がいきなり伸びて空間へ豊かに広がっていくのを知り、小さな感動を覚えた者は少なくないだろう。

大自然の中でやまびこを体験し興奮したことのある者もいるだろうし、一番手近なところでは自宅の浴室でその音響効果に浸りながら自身の歌声に酔いしれる者もいるだろう。

仏具の鈴や寺院の鐘の音を耳にすれば、洋の東西を問わずほとんど誰もが心洗われる思いを抱く。それは、文化や生活経験上、構築されていった印象に起因する反応ともいえるが、クリスタルボール、シンギングボールといった楽器を使った代替療法の場でよく語られる「波動」による物理学的な癒しも一役買っているかもしれない。

少し音楽的な見方をすれば、いずれの場合にも共通することは、日ごろ意識が偏りがちな音のインザツツから解き放たれ、人の手から既に離れてしまった響きの自由な成り行きと名残に耳を傾けているということだ。人間にとって耳を傾けるという行為は、概して集中を伴うものであるが、その対象が残響である場合は必ずと言って良いほど同時にリラックスしている。「注意して聴く」という能動的な行為と「リラックスして味わう」という受動的な状態が共存している。そして、それがまた、代替療法での効果となり得ているのだろう。

トーン・チャイムもまた残響の長い楽器の一つである。音楽療法の場をはじめとして、保育現場や初等教育のシーンでもよく取り入れられている。本稿では、筆者が授業で係わった2つの演奏実践例を示し、その効果や問題点を明らかにしたい。ここで明確に条件付けしておかなければならないのは、楽曲を演奏する楽器としてのトーン・チャイムの使用である。音を使った遊びの類はテーマの範囲ではない。

1. 保育の現場におけるトーン・チャイムの意義

トーン・チャイムはその形状から誰もが簡単に楽しめる打楽器である。アルミ合金の筒の上部に小さなハンマーが据え付けられており、軽く振ることによってそのハンマーが筒を打ち音が響く。音の高いチャイムは小ぶりで、音の低さに従って、どんどん大きくなっていく。その柔らかな音色と長い残響は誰の耳にも心地よく、聴衆のみならず演奏者自身も癒しを受けるだろう。

楽曲演奏を究めることとなれば、磨くべきテクニックも多々あるだろうが、音を発することに關しては初心者でも幼い子どもでも即時に正確な美しい音を奏でることが出来る。つまり、どう転んでも正確な美しい音が鳴り響き、プロの演奏家も羨むストレス・フリーのインザツツが確約されている楽器なのである。黒鍵5音だけを持たせたり、あるいは協和音になるような音を持たせたりすれば美しい和音もすぐに味わえる。

しかし、ひとつの筒につきひとつの音高しか発しないため、いざ何らかの楽曲を演奏するとすると複数の演奏者が必要となる。その人数は曲の音域と難易度、演奏者のレベルによ

り上下する。幼児が演奏するには一人につき一本の筒が現実的であるが、簡単な曲であれば二本を使いこなす子どももいるだろう。決して一人での曲演奏は成立せず、複数の演奏者で協力しあって初めてひとつの楽曲演奏がかなうものなので、そこには、音楽の流れに身を任せ同調するリズム感や集中力、協同と責任感を問われる。自分がどのタイミングで音を出すかのイメージトレーニングは出来るが、実際楽器を使って音を出す練習は一人ぼっちでは行えないし、必ずグループでの活動となる。とはいえ、上に述べたとおりそもそもストレス・フリーな楽器である。みんなと一緒に練習を重ねてひとつの曲が奏でられたときの達成感は大いに違いない。

しかし、複数名での楽曲演奏となると、はたしてそう簡単に達成されることなのであるか？ 将来、保育職を目指す学生たちが初めてトーン・チャイムに挑んだ時の様子を次に紹介する。

2. 実践例 A : 表現ゼミ生による「秋のうたメドレー」

平成 29 年 9 月 16 日に行われた本学の第 6 回オープンキャンパスにおける学部紹介において、参加者の高校生を前にして 2 年表現ゼミ生 10 人が「秋のうたメドレー」を披露した。ちょうど夏期休暇中でもあり、全員が揃う練習日程を確保するのが困難であったが、学生は皆、意欲的に取り組んでくれた。

「秋のうたメドレー」で扱った曲目は順に「七つの子」「村祭り」「夕焼け小焼け」「虫のこえ」「故郷」で、それぞれ主旋律と伴奏的な副旋律の 2 声で演奏した。比較的ゆったりした曲想の「七つの子」「故郷」は 2 声ともトーン・チャイムで演奏したが、「村祭り」「夕焼け小焼け」「虫の声」の 3 曲では伴奏のみをトーン・チャイム、主旋律はハンド・ベルにより奏でることにした。また、各曲の間は、途切れないように筆者によるピアノ間奏で繋ぎ、滑らかな転調を図った。さらに必要に応じて学生はその間にトーン・チャイムやハンド・ベルの持ち替えを行った。

表 1

第 6 回オープンキャンパス (17 年 9 月 16 日) 用

2 年生・表現ゼミ生による 「秋の歌」メドレー 音割り分担表

TC=トーン・チャイム、HB=ハンド・ベル

	カラー	演奏者	TC・伴奏	TC・メロディ	HB
1	緑	h		F	G、B \flat
2	赤	b	低 B \flat 、F 高 A	= (低 A)	
3	群青	i		高 A	低 C、低 D
4	薄ピンク	f	高 B \flat	低 D	A
5	水(色)	d	高 B (h)、C	高 D	

6	イエロー	a	低 A	G	F
7	ブラウン	e	E	低 C	
8	銀	g		E、高 C	E
9	オレンジ	c	D、G		B (h)
10	藤(色)	j		B b	高 C、高 D

練習を開始するにあたって、まず楽譜を作成するのに随分と手間がかかった。誰がどの音を担当するのか決める「音割り」という作業のためである。何をポイントに音割りをするかによって、その方法は変わってくるが今回は出来るだけ 10 人に均等に音を配分することを最優先とした。5 曲にわたって登場する音を全て書き出し、それぞれの出現回数を数える。その出現回数を基にして、10 人に出来るだけ平等に音を振り分ける。今度は振り分け結果に従い、譜面上で 10 人分の試奏を行う。そこで、ある奏者にとってどうしても難しいコンビネーションが見つければ、適宜他の奏者の音とトレードを行い、微調整していく。そのような作業を繰り返し出来上がった音割り分担表が表 1 である。ハンド・ベルとトーン・チャイムの両方を合わせても一人あたり 2 つか 3 つの音を担当することになった。それぞれの演奏者が自分の 2 つ 3 つの持ち分を把握するには問題はないだろうが、練習指揮者(筆者)がすべてを把握するには無理があるので、色分けによる総譜を作った。つまり、それぞれの学生の持ち分の音に固有の色を与え、音符に色付けを施した(図 1)。これにより、全ての音が誰の受け持ちであるのかをすぐに判断できるようにし、練習の円滑化を図った。さらに総譜の他に、それぞれの楽器の持ち替えを表に整理した(表 2)。メドレー式で曲間にあまり時間がないため、持ち替えがある場合は素早く確実に行わなければならないため、念のためこれを学生に配布しこれらの段取りを覚えてもらうように計らった。今回は都合上、筆者が準備を行ったが、機会があればぜひ学生にこの作業を経験していただきたい。計画する力はもちろんだが、楽譜に対する注意力が養われるだろう。

から一す、なぜなくの、からすはやまに
かーわい、なな一つの、こがあるからよ、かわい
かわいと、からすはなくの、かわい、かわいと

図 1

楽譜等の準備がしっかり整えば、演奏練習自体は簡単に済むだろうと買いかぶっていたが、きちんとした演奏を目指すにはそれなりの練習量が必要であった。最も顕著となった問題は、弱拍や裏拍に当たる音がリズムの流れに乗りきれないことである。これらの音の担当になった学生の気持ちを追体験すれば十分理解できる。その弱拍の直前の強拍、あるいはその裏拍の直前の表拍を自分で演奏していれば、このような問題は見られなかっただろう。しかし、メロディの中でその弱拍や裏拍だけを個別に一音鳴らすというのは簡単ではない。間違いなく非音楽的な行為であるからだ。それこそ、はじめに述べたリラックス感とはかけ離れた状態である。ピンポイントで打とうと集中するとますます体や腕に力が入り強張ってしまい、微妙にリズムに遅れてしまう。このような奏者は、全ての音を(少なくとも直近の前の音は)ありありと自分で打っているつもりにならないと音楽の流れに乗り切れない。あるいは、体全体で拍を大げさに意識して自分の音をむしろ軽視することである。音割りの時点で、弱拍や裏拍がひとりの担当者に偏らないように注意できれば一番良いのだが、それが不可能であれば音楽に良く慣れた者に任せたほうが良い。軽いとはいえ、楽器を振ってハンマーを打つという行為は非常に能動的な動きである。音楽に慣れていないものが、その能動的な動きを弱拍、裏拍上に行い、同時にリラックスせよというのには無理がある。

表 2

秋の歌メドレー楽器持ち替え表

TC=トーン・チャイム、HB=ハンド・ベル

演奏者	七つの子	村祭り	夕&小焼け	虫の声	ふるさと
a	TCメ: G	HB: \boxed{F}	x	x	TC伴: $\boxed{\text{低}A}$ TCメ: \boxed{G}
b	TC伴: F TC伴: A	TC伴: $\boxed{\text{低}Bb}$ TC伴: F	TC伴: F TC伴: \boxed{A}	TC伴: F TC伴: A	TC伴: \boxed{Bb} TC伴: F
c	TC伴: D TC伴: G	TC伴: D	TC伴: D TC伴: \boxed{G}	TC伴: G HB: \boxed{E}	TC伴: \boxed{D} TC伴: G
d	TC伴: C TCメ: D	TC伴: C	TC伴: C	TC伴: C TC伴: $\boxed{\text{高}B}$	TC伴: C TCメ: $\boxed{\text{高}D}$
e	TC伴: E	TC伴: E	TC伴: E	TC伴: E	TC伴: E TCメ: $\boxed{\text{低}C}$
f	TC伴: 高Bb TCメ: D	HB: \boxed{A}	HB: A	HB: A	x
g	TCメ: 高C	x	HB: \boxed{E}	HB: E	TCメ: \boxed{E} TCメ: $\boxed{\text{高}C}$
h	TCメ: F	HB: \boxed{G} HB: \boxed{Bb}	HB: G	HB: G	TCメ: \boxed{F}

i	TCメ：A	HB： <u>低C</u> HB： <u>低D</u>	HB：低C HB：低D	HB：低C	TCメ：A
j	TCメ：B♭	HB： <u>高C</u> HB： <u>高D</u>	HB：高C HB：高D	HB：高C	TCメ： <u>B♭</u>

最終的に学生たちは良い演奏を行ったが、トーン・チャイムにせよハンド・ベルにせよ、弱・裏拍打ちの音の扱いには十分な注意が必要である。初心者に対してはこれを出来るだけ避けるべきである。さもないと、彼らの生まれ持った自然なリズム感の開放を損ねることにもなりかねない。リズムに乗れていないメンバーがいる場合は、ぜひ指揮者を配置し、共通の流れを可視化するべきである。

3. 実践例 B：保育学科生による「やまびこごっこ」

保育学科の保育内容—表現 II の授業においてトーン・チャイムを取り入れた。それぞれ 13 名ずつの 2 グループに分かれ、教材「やまびこごっこ」を使用した幼児向けパフォーマンスを自由に考えて発表してもらうことにした。その際、1 つのグループには音楽経験のやや多い学生、もう一方は逆に経験の浅い学生に集まってもらい、それぞれの活動にどのような差が出るか観察した。楽譜はピアノ伴奏とコード・ネームが付されたものを使用した。各グループに分かれ、35 分ほどの計画、練習と準備のための活動時間を経て発表することにした。両グループともに使用されているコード・ネームに当たるトーン・チャイムの音（すなわち根音）を手渡した。予想通り、学生たちは手渡されたトーン・チャイムを一通り無秩序に鳴らして楽しんでいた。やはりこちよい残響には誰もが魅了されるのだ。

音楽経験の多い学生の集まったグループは 7 人の歌手、5 名のトーン・チャイム奏者、1 名のピアニストという構成で発表を行った。歌手のうち 4 人は先導、残る 3 人は呼応を担当し、それぞれ左右に分かれ、またトーン・チャイム奏者は床の上に直に座った。歌手は鮮やかな振り付けも行い、先導グループと呼応グループそれぞれにキレの良い動きを披露した。床に座ったトーン・チャイムの 5 名には、音を出す前に楽器を構える様子に明らかな音楽性がみられ、体でメロディを感じているのが良く分かった。また、基本的にコードの根音を奏すると同時に、他の和音構成音を重ねて演奏している部分も見られ、経験の差を感じられた。

音楽経験の浅い学生の集まったグループは 10 名の歌手、3 名のトーン・チャイム奏者で発表に挑んだ。また、経験の多いグループからピアニストを借り受け、演奏のサポートをお願いしていた。こちらは先導者を幼稚園の先生と見立てその 3 名が、残る 7 名の園児役となる呼応者に対峙して発表した。振付も園児と遊ぶように簡単なもので構成され、その性格上、上級者グループのようなキレはなかったが、非常に愛らしい仕上がりになっていた。何より歌声の元気の良さが、経験の浅さをまったく感じさせない堂々としたパフォーマンスへと仕上げる原動力となっていた。トーン・チャイム奏者の 3 名はこちらも床に陣取っての演奏であったが、床に置いた楽譜に集中して終始顔を上げられずにいた。ただ、経験の

浅さにも拘わらず、正しく楽譜を追ってコードの根音を演奏することに成功しており、音響的には全くたどたどしきは見られなかった。

専門的な評価をすれば、もちろん 2 つのグループのパフォーマンスにおける学生の音楽性には相違が見られたが、双方ともが与えられた教材を使って短時間で十分満足の出来るレベルに仕上げられたという結果に至った。この例では、トーン・チャイムが常に小節の頭、あるいは強拍上で鳴らされたということが大きなポイントとなっている。リズムの流れをいったん感じとった後で、(初心者にとっては) そこから無理に逸脱させられるような弱拍や裏拍での発音箇所がなかったので生理的にいたって自然に、そして容易に演奏できたのである。また、十分に残響を愉しむだけの音価が与えられていたことも成功の大きな一因となっている。

おわりに

私たちは日々さまざまな音に囲まれて生活している。意識しているにしろ、そうでないにしろ、耳は確実に無数の音情報をキャッチしている。それは、早い時期から聴覚の発達している幼い子どもとて同様である。与えられた環境の中で無意識に無秩序な情報に晒されている。ここで、垣塙に溺れかけた感覚を救いリセットを行うべく、「意識して耳を傾けてみる」という行為にスポットを当てたところ、真っ先に思い浮かんだのが「残響」であった。残響の長い楽器トーン・チャイムを保育を学ぶ学生たちがどのように使いこなすかを検討したところ、楽曲演奏を行う場合の注意点が浮かび上がってきた。楽器を振れば音は簡単に出せる。その柔らかく伸びやかな響きによって子どもたちの音に対する感性を引き出すにはこの楽器は抜群の有効性を発揮するだろう。しかし、楽曲演奏を行う際には慎重な取り扱いが要求される。実践例 A のように弱拍、裏拍ばかりの担当になってしまった場合は最早「音に酔いしれる」ためではなく、乗り遅れないように「音を必死に追う」ためだけの傾聴に陥り、生理にそぐわぬ不自然さとの戦いに終始することになってしまう。つまり、音割りをを行う際には、個々の奏者のリズム感覚を乱さないような注意を要求したい。また、一貫してゆっくりしたテンポの曲を選ぶようにも心掛けたい。まずは音価の長い伴奏的副旋律を演奏できるようにし、十分に響きを味わい楽しめるようになれば、次の段階へ歩みを進められる。リラックスした腕(と体と心)で演奏できるようになれば、弱拍も裏拍もスムーズなメロディの流れの一部と捉えられるようになるだろう。その音色に耳を傾け、今一度ゆっくりと味わうにはトーン・チャイムが非常に相応しい楽器であることに違いはない。日頃は受け身であることのほうが多い聴覚だが、子どもたちが意識的に耳を傾けることを覚え、自分を取りまく環境や他者と好奇心をもちつつ関わっていけるようこの楽器に願いを込める。

参考文献

- ・板東浩、吉田聡編、『現代のエスプリ 424 音楽と癒し』、至文堂、2002年11月
- ・志民一成、藤井康之、山原麻紀子、木村充子、長井覚子編、『音楽を学ぶということ』、教育芸術社、2016年

・高倉 弘光、「全音音階に親しもう」、鈴木楽器製作所、
https://www.suzuki-music.co.jp/ongakuno_hikidashi/03_01/、2017 年